跡見学園女子大学文学部紀要　第五四号（二〇一九年三月十五日）

『源氏物語』における反語表現（2）
―地の文・心内発話文・和歌の「ヤハ」、「カハ」について―

Rhetorical question in *the Tale of GENJI* (2): About the *"yaha" "kaha"* in narrative, one's mind part and *tanka* poetry

永田　里美
NAGATA Satomi

要旨

形式的には疑問文で聞き手に問いかけながら、話し手は当然の応答として、聞き手に反対の結論を要求する用法を「反語」と定義すると、中古では疑問を表す助詞「ヤ」、「カ」が「ハ」を伴った「ヤハ」「カハ」となったときに、その意味を担うことが多い。本稿は永田（二〇一八）に続き、中古の和文資料である『源氏物語』の地の文、心内発話文、和歌における「ヤハ」「カハ」の結びの形式に着目した調査を行った。

調査の結果、和歌には定型的な表現としての偏りがみられるものの、「ヤハ」「カハ」の結びの形式は全体として会話文の調査結果に近似していることがわかった。

「ヤハ」

・用例のほとんどが反語表現と解釈される。

・結びの形式には基本形（存在詞多数）、アリを含む助動詞など、客体的、既実現・現実の要素が認められる。

・調査対象中、和歌においてのみ「ヤハ～スル」「ヤハ～セヌ」の用例がみられ、地の文、心内発話文には当該型式の用例がみられない。

「カハ」

・地の文、心内発話文では反語の解釈であるか否か、揺れる用例がみられるが、和歌では反語解釈に傾く。

・結びの形式には「ム」（推量）「マシ」（反実仮想）「ケム」（過去推量）「ラム」（現在推量）など、主体的、未実現・非現実の要素が認められる。

これらの特徴から、全体的な傾向として「ヤハ」と「カハ」との間で結びの形式に相違がみられること、結びの形式からみた文体上の特徴として和歌は地の文、心内発話文とは位相を異にすることがうかがえる。

はじめに

（例1）また、めぐり参るとも、かひやはべるべき。

〔生まれ変わってまた、あなたと巡り会い申すとしても、親子であることが分からないとあっては、甲斐がありましょうか。いえ、甲斐などありますまい。〕

御息所→落葉宮「夕霧」『源氏物語』

（例2）親に数（かず）まへられたてまつらず、世に知られでは何のかひかはあらむ。

〔親に子としてお扱いいただけず、世間に埋もれているのでは、何の甲斐があるのだろう。いえ、甲斐などありますまい。〕

玉鬘乳母の息子→乳母の家族「玉鬘」『源氏物語』

形式的には疑問文で聞き手に問いかけながら、話し手は当然の応答として、聞き手に反対の結論を要求する用法を「反語」と定義する[1]と、中古には、疑問の助詞「ヤ」、「カ」が存在し、それらが助詞「ハ」を伴ったとき、特にその意を担うことが多いとされる。右に挙げた例文（1）、（2）がともに「甲斐などない」ことを聞き手の応答として求めている反語と解釈されるとおりである。

古来、疑問の助詞「ヤ」、「カ」については研究が重ねられてきているが、「ヤハ」、「カハ」の振る舞いについては未だ不明な点が少なくない。永田（二〇一八）では中古の和文資料である『源氏物語』をとりあげ、会話文を対象として「ヤハ」、「カハ」を調査[2]し、それらの結びの異なりに着目しながら、両者の表現価値について考察を行い、次のような結果を得た。

「ヤハ」

・用例のほとんどが反語表現と解釈される。

・結びの形式には「基本形」（存在詞多数）「ケリ」（過去）「ズ」（打消）「ヌ」（完了）「リ」（存続）など、客体的、現実・既実現[3]の要素が認められる。

「カハ」

・用例には反語の解釈であるか否か、揺れるものがみられる。

・結びの形式には「ム」（推量）「マシ」（反実仮想）「ケム」（過去推量）「ラム」（現在推量）など、主体的、非現実の要素が認められる。

本稿では同作品における調査範囲を地の文、心内発話文[4]、和歌に広げて考察を行い、「ヤハ」と「カハ」のそれぞれの構文的な特徴と表現価値をまとめてゆくこととする。

一．先行研究「ヤハ」、「カハ」について

助詞「ヤ」、「カ」が疑問に関わり、これらの助詞が下に「ハ」を伴ったときに反語の意となることは古来より、歌論書をはじめとして註釈されてきたことではあるが、「ヤハ」、「カハ」の相違について論じたものに富士谷成章の『あゆひ抄』（安永二年）がある。

そこでは「ヤハ」と「カハ」の異なりを次のように説く。

〔何やは〕里「カヤ」と言ふ。心反りて落着する事〔かは〕に似て、彼はおしなべたる理によりて静かに、これは目のあたりの勢いによりて表をおさふるを、たがへりとする。これ〔か〕と〔や〕のたがひめなり。二の言葉もとより受け様も同じならず。また先いつころ、〔かは〕は言わねどしるき理を思はせ、〔やは〕は、よし見よかしの心を含めりと人に教へらる。

〔「～ヤハ」は口語で「～カヤ」と訳す。反語となって落着することは「カハ」に似ているが、「カハ」が一般論から静かに説くのに対して、「ヤハ」は目のあたりの勢いで人や物について説くことを相違点としている。これは「カ」と「ヤ」の相違点で（も）ある。二つの助詞はもともと受ける語も異なる（カは体言・連体形を、ヤは終止形を受けるなど）。また先日、私の師から『カハ』は言わないけれども明白な道理を思わせ、『ヤハ』は、これみよがしの心を含んでいる」と教えられた。〕

永田（二〇一八）では成章の指摘する「ヤハ」の「目のあたりの勢い、よし見よかしの心」、「カハ」の「おしなべたる理によりて静かに、言わねどしるき理」の意味するところについて、各々の述部の異なりから次のように述べた。

「ヤ」は、そもそも述部を問う（肯否疑問文である）ことから、その事態が成立するか否か、さらにいえば「あるかないか」という二者択一を迫ることになる。さらに反語「ヤハ」の場合、既実現・現実事態を表す述部を用いて直截的に否定の回答を聞き手に突きつけており、そこに成章の言う「これみよがし」のニュアンスが出るといえる。

一方、「カ」はそもそも、既定の事態の一部を不定とするもの（不定疑問文）であるから、回答案にはいくつかの選択肢がある。それが反語「カハ」の場合、想像（未実現・非現実）を介することとなり、推量の助動詞が生起する。結果として婉曲的表現となり、そこから成章の言う「言わねども、静かに理を表す」のニュアンスが出るといえる。

以上は『源氏物語』の会話文を調査した結果であり、また『あゆひ抄』の言及対象は和歌とされている(5)ために、会話文以外の文体におけるさらなる調査が求められる。そこで本稿では『源氏物語』における地の文、心内発話文、和歌を調査対象とし、そこから抽出した「ヤハ」、「カハ」とその結びについてみてゆくこととしたい(6)。

二、「ヤハ」について

調査範囲において「ヤハ」は八四例得られた。そのうち心内発話文が四六例、和歌は二六例、地の文が一二例であった。それらの結びの形を表にして示す（表1）。

表1

結び	用例数
略	36
基本形	19
ベシ	8
キ	4
ズ	3
ケリ	3
リ	3
メリ	2
ツ	1
ナリ	1
ム	3
ケム	1
計	84

「ヤハ」は会話文での例がそうであったように、結びのほとんどが基本形を始めとして「ベシ」「キ」「ズ」「ツ」、アリを含む「ケリ」「リ」「メリ」「ナリ」というように客体的、既実現・現実的表現を担いうるものである。一方、主体的、未実現・非現実的表現を担う「ム」、「ケム」の用例は僅少に留まっている(7)。これらの例を含め、以下の節で詳細をみてゆくこととする。

二、一　心内発話文における「ヤハ」

まず最も用例数の多かった心内発話文における「ヤハ」（四六例）の結びを示すと以下のようになる（表2）。

表2

結び	用例数
略	22
基本形	6
ベシ	6
ケリ	2
メリ	2
リ	2
ツ	1
キ	1
ナリ	1
ム	3
計	46

基本形の内訳（括弧内は用例数を表す）は、「あり」（5）、「うし」（1）となっており、会話文の用例と同様に存在詞が多い。また、結びの助動詞としては「ベシ」の用例が目に立つ。

（例3）殿を、つらくもおはしますかな、かく苦しからでも、高き位に昇り、世に用ゐらるる人はなくやはある、と思ひきこえたまへど、〔（夕霧は）父の大臣を「ひどい仕打ちをなさるものだ。（父の地位が高いのだから）これほどつらい思いをしなくても、高位にのぼり、世間から重んじられる人がいないということがあるか（いや、父の地位によって高位高官が得られるはずだ）」と思い申されるが〕「少女」

（例4）対には、かく出で立ちなどしたまふものから、我より上の人やはあるべき、身のほどなるものはかなきさまを、見えおきたてまつりたるばかりこそあらめなど思ひつづけられて、うちながめたまふ。〔（紫の上は）女三の宮への挨拶に出向きなどなさるものの、「この自分に立ち優る人があろうか（いや、他にいるはずがない）、ただあの幼い頃の私は頼りない身の上を光源氏にお世話頂いただ

けということのなのに」、などと思い続けられ、物思いにふけていらっしゃる。」　「若菜上」

いずれの用例も、世間の常識やこれまでの経験上に基づき、当然そうあるはずだ（そんなはずはない）と反転した回答が導き出されている。

こうして「ヤハ」の結びは客体的、既実現・現実的事態が多数を占めるなか、心内発話文では「ム」を結びとする用例が三例見出された。そのうち次の一例（例5）については異文がみられた。

（例5）目に近きに心をまどはしつるほど、見たてまつることもをさをさなかりつるに、かかる雲間にさへやは絶え籠もらむと思したちて渡りたまひぬ。〔（光源氏は）病人の紫の上に心を痛めているあいだ、女三宮にお会いすることもおさおさなかったので、「このような雨雲の絶え間（紫の病状がよくなったこの時）にまでこちらに引きこもっていられようか（いや、そうもゆくまい）」とお思いになり、女三宮のもとにお渡りになった。〕　「若菜下」

青表紙本系「やは」→「や」

（例6）さりともかくてやは年を重ねん、いまさらに人わろきことをば、と思ししづめたり。

〔（光源氏は紫の上を明石に迎えたいと思うものの）「いくらなんでも、いつまでもこのまま年を重ねようか（いや、そうもゆくまい）、いまさら見苦しいことを、」とこらえておいでになる。〕　「明石」

（例7）かくてのみやは、新しき年さへ嘆き過ぐさむ、ここかしこにもおぼつかなくて閉ぢ籠りたまへることを聞こえたまへば、今はとて帰りたまはむ心地も、たとへむ方なし。

〔（薫は大君の死を受けて）「こうしてばかり、新年になってまで嘆き過ごそうか（いや、そうもゆくまい）あちらこちらから山里暮らしに苦情の申し出をなさるので、今はひとまず京都にお帰りになろう」という思いも、またとなく悲しい。〕　「総角」

これらはいずれもこのままでいられようか、否、いられまいという意味合いで共通している。このことから、一種の慣用的表現と捉えることも可能であるが、「ヤハ」の結びにムの助動詞が現れる率は僅少に留まるために、調査範囲を広げた考察を要する。

二．二　地の文における「ヤハ」

地の文における「ヤハ」の用例は少ない。結びについてはこれまでにみてきたものと同様、述部に客体的表現、既実現、現実の傾向がみられる（表3）。

表3

結び	略	基本形	ベシ	リ	キ	計
用例数	6	3	1	1	1	12

表中、基本形の内訳（括弧内は用例数を表す）は、「あり」（2）、「おぼゆ」（1）である。「ベシ」の他は「リ」「キ」という既実現を表す助動詞が結びとなっている。用例を挙げておく。

（例8）いづれの御方も、我人に劣らむと思いたるやはある、とりどりにいとめでたけれど、うちおとなびたまへるに、いと若ううつくしげにて、切に隠れたまへど、おのづから漏り見たてまつる。

〔どのお方も自分が人より劣っているであろうとお思いの方はいるか（いや、いない）、それぞれにおきれいであるけれど、皆多少、若い盛りを過ぎていらっしゃるなか、（藤壺は）たいそう若くかわいらしくいらして、懸命にお隠れになるけれど、（光源氏は）自然とお見かけ申し上げる〕　「桐壺」

（例9）九月十余日、野山のけしきは、深く見知らぬ人だにただにやはおぼゆる。

〔九月十日過ぎのこと、野山の気色はものの風情をわきまえない人でさえ並一通りと思われるだろうか（いや、皆、心を動かされる）〕　「夕霧」

（例10）奏したまふことのならぬはなかりしかば、この御いたはりにかからぬ人なく、御徳を喜ばぬやはありし。やむごとなき上達部、弁官などの中にも多かり。

〔（光源氏が）奏上なさることで実現しないことはなかったのだから、この君の庇護にあずからぬ者はなく、恩顧を感謝しない人があったか（いや、皆感謝した）。貴い身分の公卿や弁官のなかにもそういう人は多い。〕　「須磨」

二、三　和歌における「ヤハ」

和歌における「ヤハ」の用例とその結びをみておく（表4）。

表4

結び	基本形	略	ズ	キ	ベシ	ケリ	ケム	計
用例数	10	8	3	2	1	1	1	26

これまでにみてきた会話文、心内発話文、地の文では「ヤハ」の結びは省略される例が最も多いのに対して、和歌については若干であるが基本形の例が多い。その内訳（括弧内は用例数を表す）は、「す」（5）、「かくる」（1）、「聞く」（1）、「けつ」（1）、「悲し」（1）、「をしけし」（1）であり、存在詞はみられなかった。次に挙げるのは結びの形として最も多かった「やは～する」の用例の一部である。

（例11）さしぐみに袖ぬらしける山水にすめる心は騒ぎやはする

耳慣れはべりにけりやと聞こえたまふ。

〔あなたが不意に感涙し、袖を濡らされた山水にも、ここに住んで勤行にて心を澄ましている私の心は騒ぎはするか（いや、しない）。耳慣れてしまっておりますよと申し上げなさる〕

僧都→光源氏「若紫」

（例12）つねなしとここら世を見るうき身だに人の知るまで嘆きやはする

このよろこび、あはれなりしをりからも、いとどなむ

〔世間は無常なものだとたくさんの例を見る厭わしい身でさえ、他人がそう見るまでに嘆きはするか（いや、しない）。お便りへのお礼の気持ちはしみじみと悲しい折ですからひとしおです〕

薫→小宰相の君「蜻蛉」

これらは自己の意志を題材にしているので、「やは～せむ」とあってよいかと思われる箇所であるが、「やは～する」の形式をとる。このことに関連して、その否定表現である「やは～せぬ」についてもふれておきたい。本調査では「ヤハ」が「ズ」を結びとする例が和歌においてのみ三例存在した。

（例13）頭中将して御消息あり。「一日の花の蔭の対面の飽かずおぼえはべりしを、御暇あらば立ち寄りたまひなんや」とあり。御文には、わが宿の藤の色のこきたそかれに尋ねやはこぬ春のなごりをげにいとおもしろき枝につけたまへり。

〔頭中将を使者に（内大臣から）お便りがある。「先日、花の蔭で対面しただけでは心残りに思われますので、今日、お暇がおありでしたらお立ち寄りなさいませんか」とのことである。お手紙には、私の家の藤の花が色美しく咲くこの夕暮れに春の名残を尋ねませぬか、と実に見事な藤の枝に結びつけておられる。〕

内大臣→夕霧「藤裏葉」

右の例で着目されるのは、夕霧を自邸に勧誘する表現として「立ち寄りたまひなんや」を用いる一方で、和歌では「やは来ぬ」が用いられていることである。このことは「やは～する」、「やは～せぬ」が和歌的な定型表現であったことをうかがわせる。残りの用例を挙げておく。

（例14）「慕ひやせまし」とのたまへば、うち笑ひて、うちつけの別れを惜しむかごとにて思はむ方に慕ひやはせぬ

馴れて聞こゆるをいたしと思す。

〔突然の別れを惜しむのは口実で、本当は思うお方（明石）のほうを慕いはせぬか（いや、慕うはずである）（この宣旨の娘の）心得た体に申し上げるのを光源氏は言い当てられてお困りになる〕

宣旨の娘→光源氏「澪標」

（例15）夏の御方より、御更衣の御装束奉りたまふとて、

夏衣たちかへてける今日ばかり古き思ひもすすみやはせぬ

御返し、

羽衣のうすきにかはる今日よりはうつせみの世ぞいとど悲しき

〔花散里から、衣替えのご装束を献上なさるということで、夏衣にお召し替えになる今日は特に、亡くなった方をおしのびになる気持ちがつのりはせぬか（いや、つのるはずだ）返事として、蝉の羽のように薄い夏衣に着替える今日からは、空蝉のような儚い世がいよいよ悲しい〕　花散里→光源氏「幻」

これらの用例も相手の意志を題材にする点において「じ」を用いたいところではある。しかし、高山（一九八八）が述べるように、「じ」は係助詞の結びにはならず、桜井（一九七〇）が指摘するように係助詞の結びにあたって「む」の打ち消しは「ざらむ」となる。ただし和歌では文字数の制限があるために「やは～ざらむ」は用いにくいと考えられる。そこで「やは～せぬ」が用いられ、その対立表現として「やは～する」が定型的な表現として用いられていたのではなかろうか。「やは～ぬ」は尾崎（一九六二）、山口（一九九〇）が指摘するように古典語において用例数の少ない表現形式である。これは和歌的な定型表現であったためではないかと考えられる。

最後に「ヤハ」の結びに「ケム」という推量の助動詞が表れた用例についてみておく。「ヤハ」は現れる用例がほぼ反語と読み取れるなか、この用例については反語か否か迷われるものであった。

（例16）いにしへもかくやは人のまどひけんわがまだ知らぬしののめの道

〔（夕顔を廃院に連れてゆく途において）昔の人もこのようにさまよい歩いたのだろうか。私が今まで知らなかった夜明けの（恋の）道行きに〕　光源氏→夕顔「夕顔」

恋した女を連れ出して荒野をさまようことは昔物語にも存在することから、この例は反語というよりは後述する「思い巡らし」を表す「カハ」の用法に近いものである。

こうした傾向からうかがえるのは、和歌は会話文とも心内発話文とも異なった文体、つまり位相差を有しているということである。

しかしいずれにせよ、「ヤハ」全体の傾向をみれば、心内発話文、地の文、和歌ともに、高山（二〇一六）のいう「現場型疑問文」に該当する用例が大半を占めていることがわかる。通常、「現場型疑問文」は対話場面が目立つとされる[8]が、反語表現に関して述べれば、会話文のみならず本稿の調査範囲においても認められることがわかる。

三、「カハ」について

ここからは「カハ」と結びの概要をみてゆく。本調査において「カハ」

は一八〇例見出されたが、その意味用法については「ヤハ」と異なり、反語か否かの解釈が揺れるものが存在する。永田（二〇一八）では会話文の調査において「ヤハ」が全て反語の解釈がなされるのに対して「カハ」には次の四つのタイプがみられることを指摘した。

【1】反語文タイプ

【2】反語の解釈が可能であるものの、「どうしてよいかわからない」というような自己の内面における困惑（不定）の意味が強く、反語と不定疑問文との間に截然とした差が設けにくいタイプ。

【3】聞き手に積極的に結論を求めない、「いやはや」程度の意味合いしか持たない応答詞タイプ。

【4】反語の解釈が難しい不定疑問文タイプ

（永田二〇一八、九七～九九頁）

本稿の調査範囲においても右のような四タイプを見出すことができた。また、【4】の不定疑問文は一七例存在した。次のような例である。

（例17）かく契り深くものしたまひける人の、などてかはさすがに疎くては過ぎにけんと心得がたく思ひ出でらる。

〔（薫は）「このように自分と宿縁の深かった人が、そうは言っても、どうして他人として亡くなってしまったのだろう」と、納得できぬ思いで思い出される。〕　「宿木」

（例18）「年の数つもりほけたりける人のひが言にや」などあやしがりける、いづれかはまことならむ。

〔（源氏の御子孫のお話が色いろあるのは）「年をとってぼけてしまった人の覚え違えであろうか」など不審がるが、どちらが本当であろうか。〕　「竹河」

（例19）問はぬをもなどかと問はでほどふるにいかばかりかは思ひ乱るる

〔お見舞いできないのをなぜかとお尋ねにもならないまま日が経つにつけて、私はどれほど思い乱れているだろうか〕

空蟬→光源氏「夕顔」

いずれも回答を反転させることは難しい。以下の考察では、これら【4】タイプの用例を除いた一六三例を対象とする。「カハ」の結びの状況を表したものが表5である。

表5

結び	基本形	用例数
ム	略	81
ベシ	マシ	56
ケム	ラム	10
マジ	ッ	6
計		2
		1
		1
		1
		5
		163

この表から「ヤハ」とは異なり「カハ」の結びにはム系の助動詞が半数以上を占めていることがわかる。また、「ベシ」は北原（一九八一）によれば主体的表現にも客体的表現にも預かりうるものであり、「ヤハ」、

「カハ」ともに現れる。基本形は五例であり全体数の割合でいえば三％程度に過ぎない。その内訳（括弧内は用例数を表す）は、「あり」（1）、「見ゆる」（1）、「ものしたまふ」（1）、「劣る」（1）「つらし」（1）のように「ヤハ」とは異なり、バリエーションに富んでいる。このうち「ものしたまふ」、「劣る」、「つらし」の三例については異文がみられた。

（例20）何ごとかはこの人の飽かぬところはものしたまふ、わが心のあまりけしからぬすさびに恨みられたてまつるぞかしと思し知らる。

「紅葉賀」

別本系　ものしたまふ→ものしたまはん

（例21）端の方に前栽見るとてゐたるは、いづこかは劣る、いときよげなめるはと見ゆ。

「東屋」

河内本系　いづこかは→いづこは

（例22）我より外に誰かはつらき、心づからもてそこなひつるにこそあめれ、と思ふに、恨むべき人もなし。

「柏木」

別本系　つらし→本文無し

以下に、それぞれの結びの詳細と意味用法【1】【2】【3】の表れ方とをみてゆくこととする。

三．一　心内発話文における「カハ」

本稿の調査範囲における「カハ」の用例は心内発話文が最も多い。結びは略される場合が最も多いがそれに接近するようにムの結びが多数を占める（表6）。

表6

結び	略	ム	ベシ	マシ	ケム	ラム	マジ	基本形	計
用例数	47	44	9	4	1	1	1	4	111

用例中大半は【1】の反語文タイプであると解釈される。

【1】反語文タイプ

（例23）後るとても幾世かは経べき、かかる悲しさの紛れに、昔よりの御本意も遂げてまほしく思ほせど、

〔（光源氏は紫の上の死後）「生き残るといってもどれほど長らえていられようか（いや、長らえることはできまい）、このような悲しみに紛れて、昔から念願していた出家の心ざしを遂げたい」とお思いになるが、〕

「御法」

【2】思い巡らしタイプ

反語文と不定疑問文との意味の差が截然としないタイプの例が一二例

見出された。会話文ではこれらの用例は話し手が聞き手に対して困惑を表す態度が読み取れた。心内発話文の場合は、独話であるから話し手の聞き手は話し手自身である。それゆえに、用例からは煩悶や思い巡らしの態度が読み取れることとなる。

（例24）さりとて、忍びて、はた、いと便なからむ、いかさまにしてかは、人目見苦しからで、思ふ心のゆくべきと、心もあくがれてながめ臥したまへり。

〔（薫は）「そうかといって、人目を忍んで（人妻の中の君を宇治にお連れするのは）、また、全く不都合であろう。どういうふうにしたら世間体にふれず、自分の望みを遂げることができるだろうか、（いや、望みを遂げることは難しいのではないか）」と、ぼんやりと横になっている。〕　「宿木」

【3】応答詞タイプ

結びが略される用例には【3】の「いやはや」程度の応答詞タイプが目立つ。

（例25）口惜しとは思せど、ただ今は異ざまに分くる御心もなくて、何かは、かばかり短かめる世に、かくて思ひ定まりなむ、人の恨みも負ふまじかりけりと、いとどあやふく思し懲りにたり。〔（光源氏は朧月夜の入内を）残念に思われるが、さしあたっては若紫以外の方に心を分けるおつもりもなくて、「いやはや問題ではない、この長くもないような人生、こうして落ち着こう、女性の恨みは受けてはならないことよ」とひとしお臆病になり、懲り懲りの気持ちでいらっしゃった。〕　「葵」

三、二　地の文における「カハ」

次に「カハ」の用例が多かったのは地の文である。地の文における「カハ」の結びをまとめたものが表7である。

表7

結び	略	マシ	ケム	ツ	基本形	計
用例数	35	6	1	1	1	1	45

先に取り上げた心内発話文中の「カハ」と異なり、結びの略よりは推量の助動詞ムの用例数が多い。地の文におけるそれぞれの用例を挙げておく。

【1】反語タイプ

（例26）何ごとにつけてかは御心のとまらむ、うちうめかれて、夜深う出でたまひぬ。

〔（末摘花のような女性に）どこにお心が惹きつけられようか（いや、惹きつけられまい）、光源氏はつい呻くようにため息が出て、

まだ暗いうちにお帰りになった。〕　「末摘花」

（例27）そのついでにいと多かれど、さのみ書きつづくべきことかは。

〔この折りの歌は本当にたくさんあるのだが、そればかりをここに書き続けることができようか（いや、できまいので省略する）〕

「賢木」

【2】思い巡らしタイプ

（例28）内より鎖して大殿籠もりにけり。これもいつまでにかは。

〔（落葉宮は夕霧を避けて塗籠の）内側から掛け金をおろしておやすみになってしまった。（とはいえ）これもいつまで守りきれるであろうか（それはわからない）〕　「夕霧」

【3】応答詞タイプ

（例29）いとたどたどしげに聞こえたまふに、さればよと思せど、何かは、そのほどのことあらはしのたまふべきならねば、しばしおぼめかしくて、

〔夕霧がいかにも腑に落ちないことのように申し上げるので、光源氏は案の定とお思いになるけれど、いやはや、その時の事情をありのままにおっしゃることができないので、しばらく分けのわからぬふりをして、〕　「横笛」

三、三　和歌における「カハ」

最後に和歌の用例をみておく。これまでにみてきた心内発話文、地の文の「カハ」には【1】～【3】の意味用法がみられた。その一方で和歌については七例全てが反語で解釈された。結びの形式は表8のとおりである。

表8

結び	略	ム	ベシ	マシ	計
用例数	3	2	1	1	7

【1】反語文タイプ

（例30）あらためて何かは見えむ人のうへにかかりと聞きし心がはりを昔に変ることはならはずなん

〔いまさらどうしてこれまでの気持ちを変えられましょう（いえ、変えられません）。よその女性の場合はそうしたことがあると聞いております心変わりなど、昔と違ったことは今もいたしかねております。〕　朝顔→光源氏「朝顔」

（例31）巣がくれて数にもあらぬかりのこをいづ方にかはとりかへすべき

〔巣の片隅に隠れて、物の数にも入らないかり（仮）の子を、ど

こに取り返すものでしょうか（いや、取り返すものではあるまい）」

髭黒大将→光源氏「真木柱」

このように和歌の「カハ」は反語解釈に定まるものの、心内発話文、地の文における「カハ」の意味用法には広がりがみられる。しかし、いずれにせよ「カハ」の結びにム系の助動詞が多いことは着目される。

四．現代語の反語解釈がなされる疑問文との比較など

以上、本稿の調査範囲における結果をまとめると、次のようになる。

「ヤハ」

・用例のほとんどが反語表現と解釈される。

・結びの形式には基本形（存在詞多数）、アリを含む助動詞など、客体的、既実現・現実の要素が認められる。

・和歌においてのみ「ヤハ～スル」「ヤハ～セヌ」の用例がみられる。

「カハ」

・地の文、心内発話文では反語の解釈であるか否か、揺れる用例がみられるが、和歌では反語解釈に傾く。

・結びの形式には「ム」（推量）「マシ」（反実仮想）「ケム」（過去推量）「ラム」（現在推量）など、主体的、未実現・非現実の要素が認められる。

これらの特徴から、文体上の特徴として和歌は地の文、心内発話文とは位相を異にすることがうかがえるものの、全体的な傾向として「ヤハ」と「カハ」との間には結びの形式に相違が認められる。用例中の結びの形式を助動詞の構文的特徴（北原一九八一、高山一九九二）に基づいて分類して示すと表9のような分布となる。

表9

	ヤハ	カハ
基本形	19	5
時制	11	1
否定	3	0
推定系	11	11
推量系	4	90
計	48	107

（表中、○基本形…助動詞を伴わない動詞、○時制…キ、ケリ、ツ、○否定…ズ、○推定系…ベシ、マジ、メリ、ナリ（終止形接続）、○推量系…ム、ラム、ケムを示す）

さらに、これらの出現率についてまとめたものが図1である。ここから、「ヤハ」「カハ」の結びの表れ方が対照的な性格を有していることがわかる。大きな相違点としては

・「カハ」は推量表現を結びとする（主体的表現内容を提示する）

・「ヤハ」は基本形、時制、否定を結びとする（客体的内容を提示する）

傾向にあることであろう。

ベシについては「ヤハ」、「カハ」ともに共通して現れるが、これは北原（一九八一）の指摘するように、ベシが主体的、客体的表現を担うも

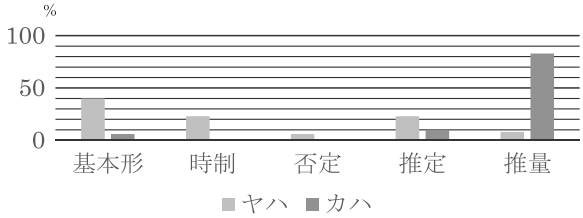
のであるからであると考えられる。また、反語表現の意味的特徴として、可能性の否定を題材にすることも関わりがあると思われる。

安達（二〇〇四）では現代語において反語解釈がなされる疑問文の述部の特徴として次の二点が挙げられている。

・存在動詞
・可能動詞

本稿の調査においても既にみてきたように、存在詞「あり」は結びの形として多くを占める。これは反語が事柄（コト）の非存在を聞き手（読み手）に提示するからであると考えられる。一方、動作性（スル）について反語は不可能を提示する。本稿の調査範囲では可能を表す動詞はみられなかったが、代りにベシが多用されていると解釈できる。なお現代語の反語解釈がなされる疑問文には「と思うか」「というのか」という形式が存在するが、本稿の調査範囲ではこうした複合形式は見出されなかった。

図１　「ヤハ」「カハ」結びの述語割合
（地の文・心内発話文・和歌）



五．おわりに

本稿では「ヤハ」、「カハ」について、『源氏物語』における地の文、心内発話文、和歌を対象とし、その構文上の異なり、および意味合いの差異を論じてきた。「ヤハ」と「カハ」の結びは会話文と同様の傾向、すなわち「ヤハ」が既実現・現実的な事態を表すのに対して、「カハ」は未実現・非現実的な事態を表すという傾向がみられた。ただし、和歌については、その文体上の制約上、結びの形と意味用法に偏りがみられた。

今後は、調査対象を中古の和文系資料全般へと広げることにより、これらが『源氏物語』の作品における作者の傾向であるのか、一般的な語法であったのかをみてゆく必要があろう。また反語表現を担うものとして、打ち消しの助動詞を伴った否定疑問文「～ズヤ」、「～ザランヤ」、「～ジヤ」、「～マジヤ」、「～ヌカ」、あるいは推量の助動詞を伴った「～ムヤ」などとの比較考察も必要であろう。今後の課題としたい。

【註】

（1）西洋の修辞法では「修辞（的）疑問（Rhetorical question）」と称されることが多い。訴えかけの文彩としては設疑法ないし設問法の下位に位置付けされる。また、「反語法」とは例えば「テストで欠点ばかり取り続け

るとは、まさに天才だ」というように、表現形式と内容が食い違っているものを指す。この観点に立つと、修辞疑問文は大きくは反語法の一種でもあるが、本稿では伝統的な国語学一般に使用される用語として「反語」を用いる。

（2）調査にあたっては、コーパス検索アプリケーション「中納言」（国立国語研究所）を用いて、『源氏物語』から、キーとして助詞「ヤ」、「カ」、後方共起語として助詞「ハ」を含む用例を抽出した。その後、稿者が『新編日本古典文学全集』（小学館）にて確認をした。

（3）客体的表現と主体的表現については北原（一九八一）、既実現・現実と未実現・非現実については野村（一九九四）、小柳（二〇一四）における「アリ」の解釈に基づいている。

（4）地の文において作者が登場人物の心情に寄添った語りを行った場合、地の文と心内発話文とを区分することは難しいが、ここでは『新編日本古典文学全集』（小学館）の校注に従うこととした。

（5）中田・竹岡（一九六〇）が指摘するように『あゆひ抄』は証左として広い文献に目が配られているものの、『あゆひ抄』に言及されるのは和歌を対象としている。

（6）校異は池田亀鑑編『源氏物語大成』（中央公論社）による。

（7）北原（一九八一）による構文的な観点に立つと、これらの「ベシ」「ズ」「ケリ」「リ」「キ」「ツ」「メリ」は客体的な表現を預かりうる助動詞とされる。助動詞「ナリ」を基準に、それに上接するものは客体的表現、下接するものは主体的表現を預かるというもので、「キ」「リ」「ツ」は常に上接、「ベシ」「ズ」「ケリ」は上接も下接も可能であるが、下接の用法は限られている。「メリ」は助動詞「ナリ」に下接する助動詞ではあるが、その活用形のあり方から客体的要素が強いと指摘されている。また「ベシ」「ズ」「ケリ」「メリ」「リ」は潜在的に存在詞「アリ」を含みうるものである。「アリ」については、野村（一九九四）に「『あり』は基本的に何かが漠然と存在するのではなく、今ここに存在するという実在を表す」とある。小柳（二〇一四）では「『あり』を含むものはすべて既実現・現実を表す」と指摘されている。一方、「ケム」「ム」は北原（一九八一）によれば常に助動詞「ナリ」に下接しかしない主体的な表現を担う助動詞である。小柳（二〇一四）では「未実現・非現実」を表す助動詞に分類される。

（8）高山（二〇一六）では、中古の和文資料（※）の疑問文、約一万二千の用例数のうち、約七割がモダリティ形式（ム、ラム、ケム、マシ、ジ）を伴うと述べている。これを同論考では「観念型疑問文」と称する。

一方、モダリティ形式を使用しない疑問文を「現場型疑問文」と称し、その特徴として次の五点を挙げる。

①対話場面が目立つ（問答、即答性が高い）
②存在詞の使用が多い
③述語は基本形、キ・ツが多い（タリ・リ・ヌ・ケリ少数）
④「～と問ふ」等で質問文であることを明示
⑤ダイクシス要素（指示詞）などが目立つ（三八頁）

※調査対象は『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『土佐日記』『枕草子』『源氏物語』（「葵」～「朝顔」巻）における疑問文（反語表現も含む）一二八二例である。（同論考三一～三二頁）

【参考文献】

安達太郎（二〇〇四）「疑問文における反語解釈をめぐる覚え書き」『京都橘女子大学研究紀要』三一

尾崎知光（一九六二）「『やは―ぬ』の特殊用法」『文学語学』二三　日本古典文学会
小田勝（二〇一五）『実例詳解古典文法総覧』和泉書院
岡崎正継（一九九六）『国語助詞論攷』おうふう
川上徳明（二〇〇五）『命令勧誘表現の体系的研究』おうふう
北原保雄（一九八一）『日本語助動詞の研究』大修館書店
此島正年（一九七三）『国語助詞の研究』桜楓社
小柳智一（二〇一四）「古代日本語研究と通言語的研究」（定延利之編『日本語学と通言語的研究との対話―テンス・アスペクト・ムード研究を通して―』）くろしお出版
近藤泰弘（一九八七）「古文における疑問表現―「や」と「か」―」『国文法講座3古典解釈と文法―助詞の機能』（『日本語記述文法の理論』ひつじ書房二〇〇〇年　所収）
阪倉篤義（一九九三）『日本語表現の流れ』岩波書店
桜井光昭（一九七〇）「『じ』は『む』の否定か」『月刊文法』二―八
佐々木健一他（二〇〇六）『レトリック事典』大修館書店
高木和子（二〇一四）「『源氏物語』に現れた手紙―求愛の和歌の贈答を中心に」『歴史語用論の世界』ひつじ書房
高山善行（一九八八）「《係り結び》と《推量の助動詞》中古語における文表現と助動詞の交渉」『語文』五一　大阪大学国語国文学会
高山善行（一九九二）「中古語モダリティの階層構造―助動詞の意味組織をめざして―」『語文』五八
高山善行（一九九三）「モダリティとモード―古代語における仮定条件文の帰結表現をめぐって―」『日本語学』一二・一二
高山善行（二〇一六）「中古語における疑問文とモダリティ形式の関係」『国語と国文学』九三・五　東京大学国語国文学会
富岡宏太（二〇一四）「中古和文における体言下接の終助詞カナ・ヤ」『日本語の研究』一〇・四
中田祝夫・竹岡正夫（一九六〇）『あゆひ抄新注』風間書房
永田里美（二〇一八）「『源氏物語』における反語表現―会話文中の「ヤハ」、「カハ」について―」『跡見学園女子大学文学部紀要』五三
野内良三（一九九八）『レトリック辞典』国書刊行会
野村剛史（一九九四）「上代語のリ・タリ」『国語・国文』六三（一）
藤原浩史（二〇一四）「平安・鎌倉時代の依頼・禁止に見られる配慮表現」（野田尚史・高山善行・小林隆編『日本語配慮表現の多様性』くろしお出版）
松下大三郎（一九七四）『改撰標準日本文法』勉誠社
松村明編（一九六九）『古典語現代語助詞助動詞詳説』学燈社
森野宗明（一九七五）『王朝貴族社会の女性と言語』有精堂
山口堯二（一九九〇）『日本語疑問表現通史』明治書院
GOTO Risa (2018) *Rhetorical Questions–A Relevance–Theoretic Approach to Interrogative Utterances in English and Japanese*, Hituzi Syobo, Japan